

2021 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

居住形態と主観的・客観的困窮が
大学生活の悩みに及ぼす影響

法学部1年 平松 莉奈

居住形態と主観的・客観的困窮が大学生生活の悩みに及ぼす影響

1. はじめに

本稿の目的は、自宅生と自宅外生の間における大学生生活の悩みの違いを明らかにすることにある。大学生になると、一人暮らしを始める人が増える。親元を離れて暮らす自宅外生と実家で暮らす自宅生では大学生生活において多くの違いがあるだろう。例えば、食生活に関して、食生活を自分で管理する自宅外生は自宅生と比べて栄養バランスが偏りやすくなったりするかもしれない。男子大学生の居住形態と野菜摂取量の関係を調査した先行研究では、自宅生と自宅外生と比較して自宅生の方が有意に緑黄色野菜およびその他の野菜を食べていると示されている（吉岡・小川 2015）。また、大学への通学時間に関して、一人暮らしの学生の平均は 24.8 分であるのに対して自宅生の平均は 77.2 分であり、52.4 分の差がある（ベネッセ総合教育研究所 2008）。食生活や通学時間に限らず自宅外生は、自宅生に比べて時間や生活の自由度が増すと考えられるが、その一方で、家族が近くにいないことや生活等の乱れに伴う悩みを抱えやすいかもしれない。

2. 先行研究

自宅外生の悩みに関係する先行研究としては、一人暮らしが大学生活への適応や不安感に与える影響を調べたものがある。たとえば、首都圏国立大学 2 校に通う一人暮らしの学生を対象にした調査からは、一人暮らしの捉え方の形成に大きく関わっているのは親子関係であり、大学生活への適応に影響を及ぼしているのは一人暮らしに対する捉え方ではなく親からの独立意識であるとの点が指摘されている（加藤・井上 2017）。また、理学療法学科の学生の通学環境と不安度の関係を調べた研究では、実家からの距離が遠い自宅外生の方が近い自宅外生より有意に不安度が高いことが認められた（松永他 2012）。他方、この研究では、自宅生と自宅外生で不安度に有意差は認められないとされている。

これらの先行研究は、自宅外で暮らす学生の間で、適応や不安度の違いが生まれる背景を明らかにするものである。他方、自宅生と自宅外生の間の悩みの違いについては、加藤・井上（2017）では確認されておらず、松永他（2012）は入学直後の理学療法学科の 1 年生に限定した調査となっている。それでは、学部・学年を限定せず入学直後ではない時期に調査を行った場合においても、自宅生と自宅外生の間に、大学生活への考え方や不安や悩みについて、有意な差がないのであろうか。

以上の課題を踏まえ、本研究では、入学時期から一定の期間を経た頃（10～11 月）に実施された全国的な学生調査のデータを用いて、学部・学年を限定せずに見た場合、自宅生と自宅外生の大学生生活に対する評価や悩みに、どのような差があるのか

を分析する。また、自宅外生が自宅生よりも悩みを抱えやすいという場合、その背景には、どのような要因が関係しているのだろうか。分析結果を先取りすると、自宅生と自宅外生の間の悩みにおいて差が顕著に大きいのは、生活費やお金に関するものである。そこで、他の悩みに対しても、経済的困窮の度合いが影響を与えているのではないか、との仮説のもとに、自宅生と自宅外生は大学生活の悩みの違いの背景となる要因についても分析していく。

3. 調査方法

自宅生と自宅外生の特徴や悩みについて調査するため、東京大学社会科学研究所のデータベースから入手した全国大学生生活協同組合連同会の学生生活実態調査（第55回学生生活実態調査，2019）のデータ分析を行った。この学生生活実態調査は郵送またはメールで依頼し、Web画面から回答するWeb調査である。調査対象は全国の国公立・私立大学（参加大学数は83）の学部学生で、回収数は21,846人である。調査時期は2019年10～11月である。回答者のうち、男性は10,640人、女性は10,469人、回答しない・無回答は737人であった。また、回答者の学年は、1年生は6,345人、2年生は5,537人、3年生は4,976人、4年生は4,495人、5年生は254人、6年生は239人であった。回答者の所属学部は文化系10,366人、理科系8,827人、医歯薬系2,653人であった。自宅生と自宅外生の区別については、現在の住まいに関する質問への回答で判断した。回答者のうち、自宅生は11,809人、自宅外生は10,037人であった。なお、以下に示す分析では、自宅生と自宅外生の間の違いを検証するに当たり、フィッシャーの正確確率検定（Fisher's exact test）を用いた。統計ソフトはjs-STARを用いた。

4. 調査結果

4.1 自宅生と自宅外生の大学生活に対する評価と悩みの違い

まず、自宅生と自宅外生の大学生活に対する評価について、大学生活全般の充実度に関する回答を比較した。大学生活全般について「充実している」もしくは「まあ充実している」と回答した回答者の割合は、自宅生だと87.5%であるのに対し、自宅外生は88.7%で、両者の差は統計的にも有意であった（ $p < .01$ ）。わずかな差ではあるが、自宅外生の方が、自宅生よりも大学生活が充実していると考えられる傾向にあるようだ。

次に、自宅生と自宅外生の間で、悩みの有無を比較する。悩みの有無については、選択肢の中から、「日頃悩んでいることや気にかかっていること」について、該当するものすべてを選択する、という形式の質問となっている。選択肢は、「生活費やお金のこと」（以下、生活費・お金）、「授業・レポート等勉学上のこと」（以下、勉学

上のこと)、「生きがいや夢中になれることが見つからないこと」(以下、生きがい)、「専攻分野や進路のこと」(以下、専攻分野・進路)、「就職のこと」、「友だちができない(いない)・対人関係がうまくいかないこと」(以下、友だち・対人関係)、「恋愛のこと」、「自分の性格や能力のこと」(以下、自分の性格や能力)、「住居や生活の雑事」、「時間が足りないこと」、「アルバイトのこと」、「政治や社会の動き」、「サークル等の活動のこと」(以下、サークル等)、「心身の不調・病気など健康のこと」(以下、心身の不調・健康)、「家族のこと」、「その他」、「特にない」の17項目である。

表1では、それぞれの項目を選択した回答者の割合(選択割合)を、自宅生、自宅外生の別に示している。また、両者の選択割合の差と、検定結果を併せて示している。表中の項目は、自宅生と自宅外生の間の選択割合の差が大きい順に並べている。分析の結果においては、生活費やお金、住居や生活の雑事、専攻分野や進路のこと、心身の不調や健康のこと、サークル等の活動のこと、対人関係がうまくいかないこと、について、自宅外生の方が悩みがあると回答する傾向があり、統計的にも有意だった。松永他(2012)では自宅生と自宅外生で不安度に有意差は認められなかったが、この結果から自宅外生の方が大学生活の悩みを抱えやすい傾向にあることがわかった。

表1 自宅外生と自宅生の、悩みの有無の割合の差

	選択割合		選択割合の差 (B-A)	検定結果
	自宅生(A)	自宅外生(B)		
生活費・お金	36.8%	50.2%	13.4%	p<.01
住居や生活の雑事	3.6%	10.2%	6.6%	p<.01
専攻分野・進路	24.3%	27.5%	3.2%	p<.01
心身の不調・健康	8.5%	10.6%	2.1%	p<.01
サークル等	11.3%	12.5%	1.2%	p<.01
友だち・対人関係	10.6%	11.7%	1.1%	p<.01
生きがい	20.3%	21.2%	0.9%	.10<p
アルバイトのこと	18.5%	18.5%	0.0%	.10<p
自分の性格や能力	24.7%	24.6%	-0.1%	.10<p
政治や社会の動き	5.0%	4.9%	-0.1%	.10<p
その他	0.5%	0.4%	-0.1%	.10<p
恋愛のこと	20.7%	20.3%	-0.4%	.10<p
家族のこと	7.7%	7.1%	-0.6%	.05<p<.10
勉学上のこと	42.7%	41.6%	-1.1%	.10<p
時間が足りないこと	27.2%	25.7%	-1.5%	p<.05
特にない	10.9%	9.0%	-1.9%	p<.01
就職のこと	39.6%	36.3%	-3.3%	p<.01

4.2 自宅生と自宅外生の悩みと主観的な経済的困窮(暮らし向き)

以上のように、自宅外生は、自宅生に比べて、いくつかの項目で、より悩みを抱えやすい。特に、自宅生と自宅外生の間の悩みにおいて差が顕著に大きいのは、生活費やお金の問題である。自宅生と自宅外生の違いの一つは、経済的困窮の度合い

にあると言えるだろう。このような経済的困窮の度合いの違いが、他の悩みにおける自宅生と自宅外生の差にも反映されているのではないか。また、自宅外生のなかでも、経済的困窮の度合いが大きい学生ほど、より悩みを抱えやすいのではないか。

これらの点を検証するため、まず、回答者の主観的な経済的困窮の度合いに関する回答に基づいて、自宅生と自宅外生の違いと、悩みの有無との関係を検討していきたい。主観的な経済的困窮の度合いについては、現在の暮らし向きについて尋ねる質問への回答（選択肢は「大変楽な方」「楽な方」「普通」「苦しい方」「大変苦しい方」）に基づいて判断した。この質問に対し、暮らし向きが楽な方であると答えた自宅生の割合は 59.3%（「大変楽な方」「楽な方」の合計）、楽な方ではないと答えた自宅生の割合は 40.7%であった（「普通」「苦しい方」「大変苦しい方」の合計）。これに対し、自宅外生のなかで、暮らし向きが楽な方であると答えた自宅外生の割合は 53.3%、楽な方ではないと答えた自宅外生の割合は 46.7%であった。両者の差は統計的にも有意であった（ $p < .01$ ）。自宅生の方が暮らし向きが楽であると考えられる傾向にあると言えるだろう。

次に主観的な経済的困窮の度合いと悩みの有無の関係を分析する。表 2 では、自宅生の回答に基づいて、それぞれの悩みの選択割合を、暮らし向きが楽な方であると答えた回答者と、楽な方ではないと答えた回答者の別に示している。両者の選択割合の差と、検定結果も併せて示す。並びは選択割合の差が大きい順である。表 3 では、自宅外生の回答に基づいて、同様の結果を示している。

表 2 に示すように、自宅生については、生活費やお金、時間が足りないこと、勉学、家族、アルバイト、専攻分野や進路、自分の性格や能力、就職、心身の不調・健康、サークル等の活動のこと、住居や生活の雑事、友だち・対人関係について、暮らし向きが楽な方ではないと考える学生の方が、悩みがあると回答する傾向があり、統計的にも有意だった。また、暮らし向きが楽な方であると考える学生は、悩みについて特になし、と回答する傾向があり、統計的にも有意だった。一方、自宅外生については、表 3 に示すように、生活費やお金、時間が足りないこと、アルバイト、勉学、心身の不調・健康、住居や生活の雑事、就職、家族、サークル等、友だち・対人関係について、暮らし向きが楽な方ではないと考える学生の方が、悩みがあると回答する傾向があり、統計的にも有意だった。また、暮らし向きが楽な方であると考える学生は、悩みについて特になし、と回答する傾向があり、統計的にも有意だった。

以上から、自宅生と自宅外生の間に共通するポイントとして、暮らし向きが楽な方ではないと考える学生においては、生活費やお金、時間が足りないこと、勉学、家族、アルバイト、就職、心身の不調・健康、サークル等、住居や生活の雑事、友だち・対人関係といった事柄の悩みを抱えやすいと言えるだろう。このなかでも、自宅外生で暮らし向きが楽な方ではない学生の方が、自宅生で暮らし向きが楽な方

ではない学生よりも選択割合が高いのは、生活費やお金（自宅外生 60.4%、自宅生 46.1%）、アルバイト（自宅外生 22.1%、自宅生 21.4%）、心身の不調・健康（自宅外生 12.6%、自宅生 9.8%）、サークル等（自宅外生 13.5%、自宅生 12.4%）、住居や生活の雑事（自宅外生 11.9%、自宅生 4.7%）、友だち・対人関係（自宅外生 12.4%、自宅生 11.3%）、といった項目である。

表2 暮らし向きと、悩みの有無の割合の差（自宅生）

	選択割合		選択割合の差 (B-A)	検定結果
	楽な方 (A)	楽な方ではない (B)		
生活費・お金	30.4%	46.1%	15.7%	p<.01
時間が足りないこと	23.1%	33.1%	10.0%	p<.01
勉学上のこと	39.5%	47.4%	7.9%	p<.01
家族のこと	5.4%	11.0%	5.6%	p<.01
アルバイトのこと	16.5%	21.4%	4.9%	p<.01
専攻分野・進路	23.0%	26.2%	3.2%	p<.01
自分の性格や能力	23.5%	26.6%	3.1%	p<.01
就職のこと	38.7%	41.0%	2.3%	p<.05
心身の不調・健康	7.6%	9.8%	2.2%	p<.01
サークル等	10.5%	12.4%	1.9%	p<.01
住居や生活の雑事	2.9%	4.7%	1.8%	p<.01
友だち・対人関係	10.1%	11.3%	1.2%	p<.05
恋愛のこと	20.6%	20.9%	0.3%	.10<p
生きがい	20.2%	20.4%	0.2%	.10<p
政治や社会の動き	4.9%	5.1%	0.2%	.10<p
その他	0.5%	0.4%	-0.1%	.10<p
特にな	12.3%	8.9%	-3.4%	p<.01

表3 暮らし向きと、悩みの有無の割合の差（自宅外生）

	選択割合		選択割合の差 (B-A)	検定結果
	楽な方 (A)	楽な方ではない (B)		
生活費・お金	41.3%	60.4%	19.1%	p<.01
時間が足りないこと	22.0%	30.0%	8.0%	p<.01
アルバイトのこと	15.4%	22.1%	6.7%	p<.01
勉学上のこと	39.0%	44.7%	5.7%	p<.01
心身の不調・健康	8.8%	12.6%	3.8%	p<.01
住居や生活の雑事	8.7%	11.9%	3.2%	p<.01
就職のこと	35.2%	37.4%	2.2%	p<.05
家族のこと	6.1%	8.1%	2.0%	p<.01
サークル等	11.5%	13.5%	2.0%	p<.01
友だち・対人関係	11.1%	12.4%	1.3%	p<.05
自分の性格や能力	24.1%	25.2%	1.1%	.10<p
専攻分野・進路	27.3%	27.7%	0.4%	.10<p
その他	0.3%	0.5%	0.2%	.05<p<.10
政治や社会の動き	4.9%	4.9%	0.0%	.10<p
生きがい	21.2%	21.1%	-0.1%	.10<p
恋愛のこと	20.6%	20.0%	-0.6%	.10<p
特にな	10.4%	7.3%	-3.1%	p<.01

4.4 自宅生と自宅外生の悩みと客観的な経済的困窮（主な家計支持者の年収）

前節の分析結果が示すのは、暮らし向きについての回答に現われる主観的な経済的困窮の度合いが、大学生活の様々な悩みの有無にも影響するとの点である。このような経済的困窮と悩みの関係は、客観的な経済的困窮の度合いからみても、同様に確認できるだろうか。ここでは、主な家計支持者の年収（選択肢は「0円」「100万円未満」「100万円以上 250万円未満」「250万円以上 500万円未満」「500万円以上 750万円未満」「750万円以上 1,000万円未満」「1,000万円以上 1,500万円未満」「1,500万円以上」「わからない」）についての回答に基づいて、自宅生と自宅外生の違いと、悩みの有無との関係を検討していきたい。

まず、現在の暮らし向きと主な家計支持者の年収の関係を分析する。主な家計支持者の年収が500万円未満と答えた回答者（「0円」「100万円未満」「100万円以上 250万円未満」「250万円以上 500万円未満」の合計）のうち、現在の暮らし向きが楽な方であると答えた者の割合は44.2%、楽な方ではないと答えた者の割合は55.8%であった。これに対し、主な家計支持者の年収が500万円以上と答えた回答者（「500万円以上 750万円未満」「750万円以上 1,000万円未満」「1,000万円以上 1,500万円未満」「1,500万円以上」の合計）のうち、現在の暮らし向きが楽な方であると答えた者の割合は62.4%、楽な方ではないと答えた者の割合は37.6%であった。両者の差は統計的にも有意であった($p < .01$)。客観的に経済的に困窮している学生は、主観的にも経済的に困窮していると考える傾向があるといえるだろう。

次に客観的な経済的困窮と悩みの有無の関係を分析する。表4では、自宅生の回答に基づいて、それぞれの悩みの選択割合を、主な家計支持者の年収が500万円未満の回答者と、500万円以上の回答者の別に示している。両者の選択割合の差と、検定結果も併せて示す。並びは選択割合の差が大きい順である。表5では、自宅外生の回答に基づいて、同様の結果を示している。

表4に示すように、自宅生については、生活費やお金、アルバイト、家族、勉学、時間が足りないこと、自分の性格や能力、友だち・対人関係、生きがい、住居や生活の雑事、心身の不調・健康について、主な家計支持者の年収が低い学生の方が、悩みがあると回答する傾向にあり、統計的にも有意であった。また、主な家計支持者の年収が高い学生は、悩みについて特になし、と回答する傾向があり、統計的にも有意だった。一方、自宅外生については、表5に示すように、生活費やお金、家族、自分の性格や能力、アルバイト、住居や生活の雑事、時間が足りないこと、心身の不調・健康、友達・対人関係、サークル等について、主な家計支持者の年収が低い学生の方が悩みがあると回答する傾向にあり、統計的にも有意であった。また、主な家計支持者の年収が高い学生は、悩みについて特になし、と回答する傾向があり、統計的にも有意だった。

以上から、自宅生と自宅外生の間に共通するポイントとして、主な家計支持者の年

収が低い学生においては、生活費やお金、アルバイト、家族、時間が足りないこと、自分の性格や能力、友達・対人関係、住居や生活の雑事、心身の不調・健康といった事柄の悩みを抱えやすいと言えるだろう。このなかでも、自宅外生で主な家計支持者の年収が低い学生の方が、自宅生で主な家計支持者の年収が低い学生よりも選択割合が高いのは、生活費やお金（自宅外生 63.2%、自宅生 48.0%）、自分の性格や能力（自宅外生 27.3%、自宅生 27.1%）、住居や生活の雑事（自宅外生 12.1%、自宅生 5.4%）といった項目である。

表 4 主な家計支持者の年収と、悩みの有無の割合の差（自宅生）

	選択割合		選択割合の差 (B-A)	検定結果
	500万円以上 (A)	500万円未満 (B)		
生活費・お金	35.0%	48.0%	13.0%	p<.01
アルバイトのこと	16.9%	22.3%	5.4%	p<.01
家族のこと	6.9%	12.0%	5.1%	p<.01
勉学上のこと	41.7%	46.3%	4.6%	p<.01
時間が足りないこと	27.4%	30.7%	3.3%	p<.01
自分の性格や能力	24.2%	27.1%	2.9%	p<.05
友だち・対人関係	10.4%	13.3%	2.9%	p<.01
生きがい	19.7%	22.2%	2.5%	p<.05
住居や生活の雑事	3.1%	5.4%	2.3%	p<.01
就職のこと	39.2%	41.4%	2.2%	.10<p
心身の不調・健康	8.3%	10.2%	1.9%	p<.05
恋愛のこと	21.5%	23.3%	1.8%	.10<p
サークル等	11.8%	12.4%	0.6%	.10<p
政治や社会の動き	5.5%	5.8%	0.3%	.10<p
専攻分野・進路	24.8%	24.9%	0.1%	.10<p
その他	0.4%	0.5%	0.1%	.10<p
特にない	10.8%	7.1%	-3.7%	p<.01

表 5 主な家計支持者の年収と、悩みの有無の割合の差（自宅外生）

	選択割合		選択割合の差 (B-A)	検定結果
	500万円以上 (A)	500万円未満 (B)		
生活費・お金	47.4%	63.2%	15.8%	p<.01
家族のこと	6.1%	10.8%	4.7%	p<.01
自分の性格や能力	23.6%	27.3%	3.7%	p<.01
アルバイトのこと	17.5%	21.1%	3.6%	p<.01
住居や生活の雑事	9.1%	12.1%	3.0%	p<.01
時間が足りないこと	25.3%	28.2%	2.9%	p<.05
勉学上のこと	39.8%	42.4%	2.6%	.05<p<.10
生きがい	19.5%	21.7%	2.2%	.05<p<.10
心身の不調・健康	10.4%	12.4%	2.0%	p<.05
友だち・対人関係	10.9%	12.9%	2.0%	p<.05
サークル等	12.0%	13.9%	1.9%	p<.05
就職のこと	35.4%	36.8%	1.4%	.10<p
政治や社会の動き	4.8%	5.7%	0.9%	.10<p
恋愛のこと	21.3%	21.9%	0.6%	.10<p
その他	0.3%	0.3%	0.0%	.10<p
専攻分野・進路	27.6%	26.6%	-1.0%	.10<p
特にない	8.8%	6.0%	-2.8%	p<.01

4.5 主観的な経済的困窮と客観的な経済的困窮の共通点

以上、困窮の度合いが高いほどに生じやすい悩みの種類について、統計的に有意なもの数を比較すると、主観的な経済的困窮の方が、より多くの悩みとの関連があることがわかる。そのうえで、主観的な経済的困窮と、客観的な経済的困窮の両方に関係のある悩みの項目としては、まず自宅生の場合、生活費やお金、時間が足りないこと、勉学、家族、アルバイト、自分の性格や能力、心身の不調・健康、住居や生活の雑事、友だち・対人関係があり、これらにおいて、困窮の度合いが高いほど悩みが生じやすい傾向にあった（いずれも統計的に有意）。これに対し、自宅外生では、主観的な経済的困窮と、客観的な経済的困窮の両方において、困窮の度合いが高いほど、生活費やお金、時間が足りないこと、アルバイト、心身の不調・健康、住居や生活の雑事、家族、サークル等、友だち・対人関係、といった事柄において悩みが生じやすい傾向にあった。

以上を踏まえると、経済的困窮は、主観的な困窮か客観的な困窮かに関わらず、また、自宅生か自宅外生かに関わらず、生活費やお金、時間が足りないこと、アルバイト、自分の性格や能力、心身の不調・健康、家族、友だち・対人関係、といった悩みと結びつきやすいといえるだろう。また、主観的な困窮か客観的な困窮かに関わらず、自宅外生で経済的に困窮している学生の方が、自宅生で経済的に困窮している学生よりも選択割合が高い悩みの項目は、生活費やお金、住居や生活の雑事についてであった。

5. まとめ

先行研究では入学直後の理学療法学科の学生を対象とした場合、自宅生と自宅外生の間で不安度に有意差は認められないという結果が示されていたが、本研究によって、学部・学年を限定せず10・11月に全国規模で調査を行った場合、自宅生と比較して、自宅外生は大学生生活全般には満足しているものの、悩みを抱えやすい傾向があること、またそのなかでも経済的に困窮している自宅外生はより悩みを抱えやすい傾向にあることがわかった。特に、自宅外生で経済的に困窮している学生の方が、自宅生で経済的に困窮している学生よりも選択割合が高い悩みの項目については、自宅外で生活することが相乗効果となって、悩みが生じやすい事柄なのではないかと推察される。

本研究の結果を踏まえると、自宅生と自宅外生については、それぞれの悩みに合った支援が必要になると考えられる。たとえば悩みの種類として、自宅生・自宅外生の双方で選択割合が高い項目（勉学等）については共通の支援が必要になるが、自宅外生の場合には、特徴的な悩み（生活費やお金、住居や生活の雑事等）についての配慮も併せて必要になると考える。

また、自宅生と比較して悩みを抱えやすい傾向にある自宅外生の中でも、特に経

経済的に困窮している自宅外生には手厚い支援が必要であるだろう。注意すべきは、経済的困窮には主観的困窮と客観的困窮があるが、学生の悩みとより関連が強いのは主観的困窮であるとの点である。客観的に困窮している学生に対して大学が支援を行うためには、世帯収入等の調査を行い、客観的困窮を抱える学生を大学側が把握することが考えられる。しかし、数的調査のみでは客観的には困窮していないとされるものの、主観的困窮を抱え悩んでいる学生を把握し、支援を行うことは難しいだろう。主観的困窮を抱える学生に対して支援を行うための方法として、学生が自身の経済的状況をどのように評価しているかを調査するアンケートの実施や、客観的経済状況に関わらず学生が相談できる施設の設置が考えられる。

しかしながら、本研究で使用したデータは新型コロナウイルス感染症流行前の2019年の調査結果であるため、現状とは異なる結果を示している可能性があり、現在の大学生の悩みに即した支援を考えるには新たに調査を行う必要があると考えられる。さらに、本研究では自宅生・自宅外生にわけて集計をしたが、大学・学部・学年・性別などによっても悩みに違いがある可能性があるため、住まいの違い以外の観点からも大学生の悩みの違いについて検討することが今後の課題といえるだろう。

参考文献

- 吉岡由美、小川晶子(2015)「男子大学生の居住形態が野菜摂取量に及ぼす影響」『長野県短期大学紀要』(70)、33-39
- ベネッセ教育総合研究所(2008)「第1回大学生の学習・生活実態調査報告書」
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_2_2_6.html (最終アクセス日 2022年1月7日)
- 加藤杏、井上果子(2017)「大学生の一人暮らしに関する捉え方が適応に及ぼす影響」『横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集』(17)、51-62
- 松永秀俊、山野薫、上田周平、安田大典、藤縄理、吉澤隆志、島崎保、武田功(2012)「入学直後の学生の通学環境と不安の関係」『理学療法科学』27(3)、325-328

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから〔「第 55 回学生生活実態調査, 2019」(全国大学生生活協同組合連合会)〕の個票データの提供を受けました。

The data for this secondary analysis, "55rd Fact-finding Survey on Student Life, 2019, National Federation of University Co-operative Associations," was provided by the Social Science Japan Data Archive, Center for Social Research and Data Archives, Institute of Social Science, The University of Tokyo.